

發派の説の如きも行はれるのである。依つて

かの影像を返還し、他郡と歩調を一にして金

澤別院の監督を受け、邪論の跡を絶ちたいと

いふにあつた。是に於いて本山は明和六年湖

法院を使僧として加賀に下し、影像を別院に

移すが爲に、本蓮寺をして郡中三十餘寺を

會して承諾の捺印を徴せしめた所、長圓寺・

稱名寺・法海寺は同意したが、本覺寺・勸修寺・

本光寺等は承服せず、勝光寺は態度を明らか

にしなかつた。是より門徒間の物情騒然、白

山山麓の幕府領諸村民までも小松に來り、勸

修寺の影像を守護せんが爲鐵炮を佛壇に列ね

て警戒し、之に對して本蓮寺は本山の命によ

ることを高唱して影像を奪取せんとした。か

かる際翌七年二月六日夜勸修寺の鐘を撞くも

のがあると同時に、群民蜂起して勝光寺と稱

名寺を襲うて亂暴し、本蓮寺・長圓寺に侵入

して堂塔佛像を破壊した。後加賀藩は本蓮寺

側が騒擾の因を爲したを非として閉門を命

じ、事一たび落着したが、而も兩黨常に相反

目してゐたのを、享和中金澤の永臨寺能起の

周旋によつて初めて和解した。

コマツシユウカクシヨ 小松集學所 ↓シ

ユウギドウ 集義堂。

コマツシヨウ 小松庄 元祿元年撰編白往

生傳に、『符鑑。字本發。又稱「口稱」。加州小

松庄人。』とある。併し符鑑は承應元年示寂し

た人で、その頃小松庄の名があつたとは思へ

ない。

コマツジヨウ 小松城 (一)沿革―能美郡

に在る。もと一向一揆の徒の據る所であつた

といふが、その沿革は明らかでない。天正八

年柴田勝家が加賀の一揆を平定するや、織田

信長は村上次郎右衛門頼勝を能美郡六萬六千

石に封じ、小松城に鎮せしめた。十一年羽柴

秀吉、丹羽五郎左衛門長秀を越前、若狹遠敷郡

及び加賀の江沼・能美二郡に封じ、頼勝は長秀

の興力となつた。十三年四月長秀歿し、子五

郎左衛門長重の時、越前・加賀の所領を除か

れたが、頼勝は尙小松城に在つて、越前北庄

城主堀久太郎秀政の興力となつてゐた。次い

で慶長二年秀政の子左衛門督秀治は越後春日

山城に移り、頼勝も亦同嶽本庄に轉ぜしめら

れた。長重は先に加賀の松任城に在つたが、

是に至り秀吉の命によつて小松城に移り、前

領四萬石の外新たに八万石を加へて加賀守と

稱した。五年前田利常長重と戦ひ、幾くもな

く和議を講じたといへ、徳川家康は長重の

豊臣氏に歿したのを責めてその領邑を覘ひ、

利長をして悉く之を併させた。寛永十六年

前田利常老を告げ、小松城を以て菟裘の地と

定め、城郭の經費を改め、翌十七年六月七日

江戸を發し、東海道を経て小松に入り、二

丸に住したが、家臣の従ひ來り邸を城下に構

へるもの多かつた。萬治元年十月十二日利常

の薨じた後、閏十二月徳川家綱は小松城を前

田綱紀に附した。蓋し寛永十五年幕府令して

一國一城の制を定めたので、封内大聖寺・小

松・七尾諸城皆廢したが、翌十六年利常更めて

小松城を築くの許可を得たため、遂に藩末に

至るまで之を遺し得たのである。今僅かに楯

櫓の遺址を存する。

十四町であつた。

(三)水利―本城は平城ではあるが、水流の迂

餘榮回甚だしく、一朝梯川の河口を閉塞する

時は、附近一帯に一大湖水の觀を呈するから、

翌りて防禦するもの、利便は大きい。殊に利

常の財力を傾けて之を經營した後は、遂に小

松の浮城といふ名稱を以て人口に膾炙するこ

となつた。その梯川の水利用した聖蹟

の設計に關しては、天明中城番であつた富田

景周の越前志三州志に『凡そ小松城の聖水は

梯川の水也。其水口は梅林院の向より入、下

駄橋下を松任町に落ち、千桑畑の後を流れ、

中蔵へ出づ。是より二流となり、一水は馬廻

の土居宅の後を廻りて、北庄橋下を過ぎて廣

處へ出で、是より一流と成て河口へ出づ。又

一水、舟止二枚橋下より白鳥壑へ出で、是よ

り牧島と中土居との間を通り、琵琶島腰を過

ぎて愛宕前へ出で、長橋の下を歴て、夫より

内壑へ入りて二派となり、左の水は筋違橋下

を流れ、葎島と樂屋つゞきの間を歴、本丸

に沿うて繞る。右の水琵琶島に沿うて、(この

間石橋の下より外壑の水流れ入るなり)靈所

橋下を通り、車橋の下より本丸を繞り、左右

の水一流となり、敵樓の向かうより白鳥壑へ

出づ。總べて此城壑の水は流ることなきゆ

ゑ、首尾の叙次なし。又一水、外壑松任町の

背口にあり。琴願寺門口より掘出し、横京

町邊にて止む。又一水、外壑あり。梯川橋の

少し下流より梯河の水入り、小橋の下を歴て、

止る。』と記してゐる。

コマツジヨウコウ 小松城考 一冊。文化

四年富田景周著。加州小松城考とも加賀州小

松城考ともいふ。小松城の起源から、前田利

常の隱居した寛永十六年乃至萬治元年の事情

が記され、小松城圖一帳、敵樓圖九帳が添へ

られてゐる。但しその文は、越前志三州志來

因概覽附録卷之三小松城の條に同じい。

コマツジヨウダイ 小松城代 初めは年寄

衆から勤め、中頃から家老を以てした。即ち

慶長五年十月前田源峰長種之を命ぜられ、そ

の子内記直知、その子對馬直正、その子長松

(孝貞)の後見志摩直成まで在城したが、寛永

十六年からは前田利常の隱居在城することに

なつた爲當職はなかつた。然るに萬治元年利

常の逝去後は横山左衛門忠次、二年正月から

前田三左衛門直之、延寶二年十一月から前田

平大夫長成が命ぜられ、七年八月長成の歿後

に至つて再び之を廢し、天和三年三月前田佐

渡孝貞が命ぜられて移住を廢し、元祿八年よ

りは月番年寄中の任となり、十六年七月また

前田備前貞親に命ぜられ、役知三千石を賜は

り、以後例となつた。寶永二年十月貞親の歿

後關職となつたが、次いで享保元年七月には

前田修理知頼、元文四年十二月にはその子修

理知久が代り、延享五年六月奥村内膳成象、

寛延二年九月青山將監聚次を経て以後連綿し

たが、明和八年九月前田修理知雄の病死して

から關職となつた。

コマツジヨウナンジヨウホクフ 小松城南

城北賦 一冊。城南賦は、小松町公領橋を界

として南方に當る地區の名所各物を書き列ね

たものであり、享和三癸亥年冬十月岸柳屋述